

# ウ マ の 獣 医 学

## ～ その 現 状 と 課 題 ～

安齊 了† (日本中央競馬会競走馬総合研究所所長)



### 1 はじめに

日本の近代獣医学は、馬をその主な対象として明治初期に始まったが、第二次世界大戦以降は牛・豚・鶏などの産業動物さらには犬・猫などの愛玩動物へと拡大しながら、今日まで発展してきた。この間の馬獣医学は、軍馬から競走馬へと対象を移しながら、全体としては規模を大きく縮小している。ここでは、より広くかつ学術的な意味を込めて“ウマ”を使いながら、わが国のウマ獣医学の現状を紹介し、課題を考察したい。

この間の馬獣医学は、軍馬から競走馬へと対象を移しながら、全体としては規模を大きく縮小している。ここでは、より広くかつ学術的な意味を込めて“ウマ”を使いながら、わが国のウマ獣医学の現状を紹介し、課題を考察したい。

### 2 わが国のウマ獣医学の変遷

(社)日本獣医学会が昭和60年に出版した「日本獣医学の進展」によれば、わが国に近代的な獣医学が導入されたのは明治10年駒場農学校に獣医学科が設けられた時であり、第二次世界大戦の終結まで、わが国の獣医学は専ら軍事的立場からの馬が重要視されていた。例えば、同出版物の「日本獣医学主要業績目録」に取り上げられている論文のうち、近代獣医学の創成期(明治23年)から終戦直前(昭和19年)までに発表された75編中の実に30編(40%)がウマに関する論文であり、この間に馬が重要視されていたかが窺える。しかし、時代を進めて昭和53年から同じく75編になると、わずか5編(7%)しか見当たらなくなる。

戦後のウマ獣医学の衰退は、軍馬の需要がなくなったことに加えて、ウマの数そのものが減ったことが大きく影響している。終戦直後の昭和21年には100万頭を超えていたわが国のウマ飼養頭数は、その後急速に減じ、58年後の平成16年には10万頭を切っている。さらに注目すべきはその用途の変化であり、軍馬はもとより農業の機械化により農耕馬の需要が急速に減少し、代わって軽種馬(ここでは、競走馬及びその育成・繁殖馬)の数及び割合が増している。農林水産省がまとめた「馬関係資料」によれば、昭和40年には30,048頭であった国内

の軽種馬飼養頭数は、20年後の昭和60年には66,995頭に増加している。この年の馬の総飼養頭数が105,568頭であったことから、その実に63.5%が軽種馬で占められていたことになる。その後もこの状況に大きな変化はなく、平成20年の統計でも総飼養頭数83,129頭中の45,277頭(54.5%)が軽種馬である。

ここで日本中央競馬会と競走馬総合研究所の変遷について簡単に紹介してみたい。わが国の近代競馬は今から150年前の文久2年(1862年)に横浜の居留外国人が行ったのがその発祥とされている。しかし、各地に設立されていた競馬倶楽部が日本競馬会として統一されるのは昭和12年であり、その後の国営競馬時代を経て日本中央競馬会が設立された昭和29年以降に、日本の競馬は本格的な発展を遂げることになる。ところが、この時すでにそれまで国是として実施されてきた馬政計画は廃止されており、大学や国家機関が行う獣医学教育や研究の対象も牛など産業動物へと急速に移行していった。日本中央競馬会は競走馬の健康管理に必要なウマの獣医学を自ら支え発展させる必要性に迫られ、昭和34年に競走馬保健研究所を設立した。当初は研究課1課だけであったが、昭和41年には運動生理課、臨床課、防疫課の3課となり、さらに昭和52年には競走馬総合研究所へと衣替えすると同時に、研究課を研究室に名称変更し、その数も5室に増やした。現在の日本中央競馬会(以下JRA)は、この競走馬総合研究所において軽種馬を中心としたウマの研究を行うとともに、国内に2カ所あるトレーニング・センターの競走馬診療所で競走馬の獣医師を自ら育てながら、その診療や防疫を行っている。

このような競馬主催者自身がウマの獣医師を育てながら診療を行い、研究も実施している国は世界に類がなく、そのことがわが国のウマの獣医学全体にも大きな影響を与えている。欧米では乗用あるいは愛玩用に飼われているウマの数が軽種馬のそれを大きく上回っており、ウマの獣医学も乗馬をはじめとするウマ全般を対象に発展している。ところが、戦後のわが国のウマ獣医学は軽種馬に大きく偏って発達してきており、軽種馬以外のウ

† 連絡責任者：安齊 了(日本中央競馬会競走馬総合研究所)

〒320-0856 宇都宮市砥上町321-4 ☎028-647-0650 FAX 028-647-0686 E-mail: toru\_anzai@jra.go.jp

マを対象とした獣医学はごく限られた範囲でしか行われていない。しかし、最近ではわが国でも乗馬が徐々に盛んになってきており、乗用馬を使った様々なイベントや社会活動も行われるようになってきている。日本のウマ獣医学の研究や臨床さらには教育も、これからはそのような社会状況の変化への対応が求められるであろう。

### 3 ウマ獣医学研究の現状と課題

わが国で獣医学研究の成果が公表される代表的な学術雑誌である *Journal of Veterinary Medical Science* (日本獣医学会会誌, 以下JVMS) に、2011年に掲載された論文を見ると、全296編中ウマに関連のあるものは10編(3.4%)である。この数字は、米国においてJVMSと同位置にある学術雑誌 *American Journal of Veterinary Research* に同年掲載されたウマに関連する論文が全203編中54編(26.6%)であることと比較すると、いかにも少ない。さらに、JVMSのウマに関する論文10編中、①8編はJRA職員が著者(共著を含む)、②7編は競走馬など軽種馬関連の研究、③7編は感染症関連の研究といった偏りが認められる。

上記の数字は、全体の一部分を垣間見たに過ぎないものの、わが国のウマ獣医学研究の現状を概ね反映している。戦後になって国や大学などの公的機関がウマの研究から次々と撤退したことに危機感を覚えたJRAは、自ら研究所を設置して競走馬など軽種馬を中心にウマの研究を行ってきた。その一方で、軽種馬以外のウマの研究や基礎的分野の研究はあまり行われなくなっているのが現状であり、多くの研究者が様々な立場から切磋琢磨する場面が少なくなったことで、わが国のウマの研究からダイナミズムが失われている感は否めない。

平成2年、このような状況に危機感を持った研究者や獣医師が中心となって「日本ウマ科学会」を発足させた。この学会は獣医学などの自然科学はもちろんのこと、人文・社会科学さらには文化や芸術にまで領域を広げ、ウマのことなら何でも受け入れているのが特徴である。現在は会員数も800人を超えており、年4回の英文及び和文雑誌の発行、年1回の学術集会の開催など、様々な活動を通じてウマ科学の維持・発展に貢献している。しかしながら、わが国のウマ研究の基盤が欧米に比べて未だ脆弱であることは事実であり、日本ウマ科学会が発足時に掲げた目標のひとつであるウマ獣医学研究の活性化も道半ばである。日本の社会がウマの研究に求める様々な要望に応えるためには、この学会がその受け皿となり、けん引役となっていく必要がある。

### 4 ウマ獣医臨床の現状と課題

その数を大きく減じたとはいえ、わが国には今なお8万頭を超えるウマが飼養されており、その数に見合うだ

けの臨床獣医師が必要である。しかしながら現状では、ウマの獣医師は競走馬が管理されている中央及び地方競馬の施設、あるいは北海道などの馬産地に集中しており、それ以外の場所や地域ではウマを診ることのできる獣医師が極端に不足している。

中央競馬の競走馬は、茨城県にある美浦と滋賀県にある栗東の両トレーニング・センターで集中的に管理されており、地方競馬が開催されている全国18の競馬場に民間牧場を含めても、競走馬の獣医師が常在している施設は限られている。また、軽種馬の生産は北海道の日高・胆振地方に集中しており、その他では限られた地域で限られた数の生産牧場が運営されているに過ぎない。これに対し、乗馬クラブは民間のクラブに大学や高校の馬術部を合わせると1千の施設があり、それらが全国に点在している。さらに、軽種馬の数が競馬の売り上げ低迷に合わせて年々減少傾向にあるのに比べて、乗馬人口は毎年4%程度増加しており、それに合わせて乗用馬の数も増えてきている。このような状況の中、病気の治療はもとより伝染病予防に不可欠なワクチン接種にも苦勞している乗馬クラブも多いと聞く。周辺にウマを診ることのできる獣医師が少ないことは、誰に頼んでもいいのかわからない、頼んでもウマに詳しくないので的確な処置やアドバイスをしてもらえない、往診費用がかかるので診療の依頼を躊躇するといった好ましくない状況を生むことになり、ウマの健康管理はもとより伝染病の早期発見と初期防疫にも支障をきたしかねない。平成22年に農林水産省がまとめた「獣医療を提供する体制の整備を図るための基本方針」には、「馬、めん羊、山羊等飼養される地域が特化している家畜については、今後とも当該地域における適切な獣医療を提供する体制を確保するため、これらの家畜について診療を行う獣医師の養成を推進する」とあるが、ウマに関していえば、地理的に分散して飼養されているウマの診療体制についても考える必要がある。

また、ウマが他の家畜と大きく異なる点のひとつに用途の多様性がある。競走用、馬術などの競技用、乗馬などレジャー用、愛玩用、使役用、食用、保護対象の在来馬など、その幅は大変広い。最近では、アニマルセラピーや子供の情操教育などに使われることも多くなってきており、乗用あるいは愛玩用のウマをその目的に用いる機会も増えている。さらに、そういった社会の変化に合わせてウマの管理方法や手入れの仕方、ウマの福祉について教える専門学校も登場してきており、獣医師への期待とその責務の幅は拡大している。一方、ウマは200種類以上ともいわれるほど品種が多く、その体格は体重が1tを超える大型馬から体高が70cm以下の小型馬まで、バラエティーに富んでいる。乗用に改良されたウマや愛玩用ポニーなど、従来はわが国であまり見かけなかった

品種も少しずつ国内で飼育されはじめてきている。これからは、このようなウマの用途や品種の違いに合わせて専門的な診療を行い関係者の指導を行うことのできる獣医師を、育ててゆく必要がある。

ウマの臨床獣医師を育てるため、公営競馬獣医師協会は毎年、獣医師生涯研修を行っている。また、4年前には日本ウマ科学会の中に米国のウマ臨床獣医師の集まりである American Association of Equine Practitioners (AAEP) を範にした馬臨床獣医師ワーキンググループがつくられ、講演会や実習を行っている。今のところ、このような活動に参加するのは現にウマの臨床家として活躍している獣医師が大半であり、またその対象も軽種馬が主体であることが多いが、先に述べたように、今後は乗用や愛玩用の馬を診ることのできる獣医師が必要となってくると考えられる。このような、将来の社会ニーズを見据えたウマ獣医師の育成には、現在のウマ獣医師関係者だけの努力では難しい面もあると感じており、より幅広い獣医師ネットワークである日本獣医師会による取り組みにも期待したい。

## 5 ウマ獣医学教育の現状と課題

わが国ではウマを主な対象に仕事をしている獣医師の数は少なく、またウマ関係に将来進みたいと考えている学生もそれほど多くはないであろう。そのような状況の中で、ウマの獣医学教育を現在の16大学でそれぞれ十分に行うことは困難なのかもしれない。

文部科学省で進められている「獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議」では、現状の獣医学教育の問題点として、最低限共通的に教育すべき内容を十分に教育できていない大学があること、実践的な力を育む教育に課題があること、獣医師養成課程の規模の小さい大学に課題が多いこと等が指摘されている。またその解決策としてモデルコアカリキュラムの策定、分野別第三者評価の導入、共同学部・共同学科の設置、教員の確保を含めた教育体制の充実、実習室等の教育環境及び付属病院の充実、外部専門機関等との連携、共用試験の導入等が提言されている。これらの提言に応じて、共同学部の設置やインターンシップがすでに動き始めており、コアカリキュラムや共用試験もその実施に向けた具体的検討が行われていると聞く。

ウマに関する大学教育の改善は、上記提言の中にある共同学部の設置や外部専門機関等との連携の中に答えを見出す必要があるのかもしれない。今年4月には山口大学と鹿児島大学が共同学部を、北海道大学と帯広畜産大学が獣医学共同教育課程をそれぞれスタートさせており、これまでウマの臨床施設や人材面で必ずしも十分ではなかった山口大学と北海道大学の学生にとって、ウマの専門教育を受ける機会の増すことが期待される。ま

た、この夏にはJRAでもインターンシップに協力して学生を受け入れることにしており、ウマの獣医学に興味を持つ学生の教育を手助けしてゆきたい。しかし、このような対応を進めてもなお、すべての大学でウマに関する教育を受けることのできる機会が学生に等しく与えられることは、容易でないと思われる。インターンシップについても、受け入れ側の都合や研修期間など様々な制約があり、学生の経済的負担も課題であろう。

ウマ専門の獣医学教育を考える場合、現在も実施されている卒業教育を大学教育と併せてさらに充実させることが、より現実的な選択枝ではないだろうか。ウマを仕事に選んだ新卒獣医師が、あるいは一定のキャリアを積んだ中堅ウマ獣医師が、それぞれ雇用先の理解と協力を得て基本的なあるいは高度な専門教育を受けることのできる機会や場所を増やし、またその内容を充実させることが、スキルを買われて契約する欧米とは異なるわが国の社会風土により適した仕組みと考える。

一方で、産業動物の臨床獣医師や家畜衛生を担当する公務員など、普段はウマ以外の家畜を主な対象にしている獣医師がウマの知識や技術を必要とする場面に遭遇する機会は稀ではないであろう。ウマ専門の獣医師を育てることとは異なる社会ニーズに応えるためには、大学でのウマに関する基礎的な教育をさらに充実させることが重要と考える。そのためには、コアカリキュラムにウマに関する項目を十分に盛り込むことが最も大切であり、さらには施設・設備・人材といった面でも、ウマの教育体制をすべての大学で一定レベルに維持しておく必要がある。特に人材面は重要であり、大学の外でウマ関連の臨床や研究を行っている（あるいは過去に行っていた）専門家を積極的に活用したり、あるいはウマを専門としない大学教員がウマを専門とする教員のいる他の大学もしくは外部のウマ専門機関で研修や実習を受ける仕組みをつくるなど、現実的な手立ての検討が望まれる。

## 6 おわりに

戦後のわが国のウマ獣医学は、競走馬を中心とした軽種馬を対象にして発展してきた。その結果、一部では欧米と比して肩を並べる成果も得られ、また優秀な人材も育っているものの、ウマ獣医学全体の層の厚さや幅の広さといった点では遠く及ばないことも事実である。これからは、わが国でも競走用以外の用途のウマの飼養が広がり、それに伴ってウマを飼育する施設の数が増え、地理的分散化も進むと考えられる。ウマの健康管理はウマだけの問題ではなく、家畜や人を含むすべての動物の衛生、さらには現代社会に暮らす我々の心と体の健康にも密接に関係している。多くの獣医師や研究者あるいは教育者がもっとウマに関心を持ってもらえることを期待し、小文の結びとしたい。